# 号外

国木田独歩

ぼろ洋服を着た男爵加藤が、今夜もホールに現われている。彼は多少キじるしだとの評がホールの仲間にあるけれども、おそらくホールの御連中にキ的傾向を持っていないかたはあるまいと思われる。かく言う自分もさよう、同類と信じているのである。

ここに言うホールとは、銀座何丁目の狭い、窮屈な路地にある正宗ホールの事である。

生一本の酒を飲むことの自由自在、孫悟空が雲に乗り霧を起こすがごとき、通力を持っていたもう「富豪」「成功の人」「カーネーギー」「なんとかフェラー」、「実業雑誌の食い物」の諸君にありてはなんでもないで

しょう、が、われわれごときにありては、でない、さようでない。正宗ホールでなければ飲めません。感心にうまい酒を飲ませます。混成酒ばかり飲みます、この不愉快な東京にいなければならぬ不幸（ふしあわせ）な運命のおたがいに取りては、ホールほどうれしい所はないのである。

男爵加藤が、いつもどなる、なんと言うてどなる「モー一本」と言うてどなる。

彫刻家の中倉の翁が、なんと言うて、その太い指を出す、「一本」

ことごとく飲み仲間だ。ことごとく結構！

今夜も「加と男」がノッソリ御出張になりました。

「加と男」とは「加藤男爵」の略称、御出張とは、特に男爵閣下にわれわれ平民ないし、平ザムライどもが申し上げ奉る、言葉である。けれどもが、さし向かえば、些の尊敬をするわけでもない、自他平等、海藻のつくだ煮の品評に余念もありません。

「戦争がないと生きている張り合いがない、ああツマラない、困った事だ、なんとか戦争を始めるくふうはないものかしら。」

加藤君が例のごとく始めました。「男」はこれが近ごろの癖なのである。近ごろとは、ポーツマウスの平

和以後の冬の初めのころを指さす。
　中倉先生は大の反対論者で、こういう奇抜な事を言った事がある。
「モシできる事なら、大理石の塊（かたまり）のまん中に、半人半獣の二人がかみ合っているところを彫ってみたい、塊の外面（そと）にそのからみ合った手を現わして。という次第は、彼ら争闘を続けている限りは、その自由をうる時がない、すなわち幽閉である。封じかつ縛せられているのである。人類相争う限り、彼らはまだ、その真の自由を得ていないという意味を示してみたいものである。」

「お示しなさいな。御勝手に」「男（だん）」は冷ややかに答えた事がある。

そこで「加と男」の癖が今夜も始まったけれど、中倉翁、もはや、しいて相手になりたくもないふうであった。

「大理石の塊（かたまり）で彫ってもらいたいものがある、なんだと思われます、わが党の老美術家」、加藤はまず当たりました。

「大砲だろう」と、中倉先生もなかなかこれで負けないのである。

「大違いです。」

「それならなんだ、わかったわかった」

「なんだ」と今度は「男（だん）」が問うている。

二人の問答を聞いているのもおもしろいが、見ているのも妙だ、一人は三十前後の痩（や）せがたの、背の高い、きたならしい男、けれどもどこかに野人ならざる風貌（ふうぼう）を備えている、しかしなんという乱暴な衣装（みなり）だろう、古ぼけた洋服、ねずみ色のカラー、くしを入れない乱髪（らんぱつ）！　一人は四十幾歳、てっぺんがはげている。比ぶればいくらか服装（なり）はまさっているが、似たり寄ったり、なぜ二人とも洋服を着ているか、むしろ安物でもよいから小ザッぱりした和服のほうがよさそうに思わ

れるけれども、あいにくと二人とも一度は洋行なるものをして、二人とも横文字が読めて、一方はボルテーヤとか、ルーソーとか、一方はラファエルとかなんとか、もし新聞記者ならマコーレーをお題目としたことのある連中であるから、無理もない。かく申す自分がカーライル！　すみのほうににやりにやり笑いながら、グビついているゾラもあり。

綿貫（わたぬき）博士（はかせ）がそばで皮肉を言わないだけがまだしも、先生がいると問答がことさらにこみ入る。

「わかったとも、大わかりだ、」と楠公（なんこう）の社（やしろ）に建てられて、ポーツマウス一件のために神戸（こうべ）市中をひきずら

れたという何侯爵（なんのこうしゃく）の銅像を作った名誉の彫刻家が、子供のようにわめいた。

「イヤとてもわかるものか、わたしが言いましょうか、」と加（か）と男（だん）。

「言うてみなさい」と今度はまた彫刻家のほうから聞く。

「僕が言うて見せる」とついに自分が口を入れてお仲間にはいった。

「なんです」男（だん）が意味のない得意の声をいだした。

「戦争（いくさ）の神を彫ってくれろと言うのでしょう」

「大ちがい！」

「すなわち男爵閣下の御肖像を彫ってくれろと言うのでしょう」
「ヒヤヒヤ、それだそれだ、大いに僕の意を得たりだ、中倉さん、全く僕の像を彫ってもらいたいのです、かく申す『加と男』その人の像を。思うにこれは決して困難なる業（ぎょう）でない。このごとくほとんど毎晩お目にかかっているのだから、中倉君の眼底には、歴然と映刻せられておるだろうと思う。」
「そして題して戦争論者とするがよかろう。」と自分が言う。
「敗（ま）け戦（いくさ）の神と言うほうが適当だろう」と中倉先生

はまた、自分が言わんと欲して言うあたわざる事を言う。
「題は僕自身がつける、あえて諸君の討論をわずらわさんやだ、僕には僕の題がある。なにしろ御承諾を願いたいものだ。」
「やりましょうとも。王侯貴人の像をイジくるよりか、それはわが党の『加と男』のために、じゃアない、ためにじゃアない、「加と男」をだ、……をだをだ、……。だから承知しましたよ。承知の助だ。加と公の半身像なんぞ、目をつぶってもできる。これは面黒い。ぜひやってみましょう、だが。」先生、この時、チョイと目

を転じて、メートルグラスの番人を見た、これはおかわりの合図。
「だが、……コーツト、（老人は老人らしい、接続詞をつかう。）題はなんといたしましょう、男的閣下。題は、題は。」
「だから言うじゃアないか、題はおれが、おれが考えがあるから可（エー）と言うに。」
「エーと仰せられましても、エーでごわせんだ。……めんどうくせえ、モーやめた。やめた、……加と男の肖像をつくること、やめた！　ねえ、そうじゃアないか満谷（みつたに）の大将」と中倉先生の気炎少しくあがる。自分

が満谷である。
「今晩は」と柄にない声を出して、同じく洋服の先生がはいって来て、も一ツの卓に着いて、われわれに黙礼した。これは、すぐ近所の新聞社の二の面の（三の面の人は概して、飲みそうで飲まない）豪傑兼愛嬌者（あいきょうもの）である。けれども連中、だれも黙礼すら返さない、これが常例である。
「そうですとも、考えがあるなら言ったがいいじゃアないか、加藤さん早く言いたまえ、中倉先生の御意（ぎょい）に逆ろうては万事休すだ。」と満谷なる自分がオダテた。ケシかけた。

「号外という題だ。号外、号外！　号外に限る、僕の生命は号外にある。僕自身が号外である。しかりしこうして僕の生命が号外である。号外が出なくなって、僕死せりだ。僕は、これから何をするんだ。」男の顔には例の惨痛の色が現われた。

げにしかり、わが加藤男爵は何を今後になすべきや。彼はともかくも、衣食において窮するところなし。彼には男爵中の最も貧しき財産ながらも、なおかつ財はこれあり、狂的男爵の露命をつなぐ上において、なんのコマルところはないのであるが、彼は何事もしていない。

「ロシヤ征伐」において初めて彼は生活の意味を得た。と言わんよりもむしろ、国家の大難に当たりてこれを挙国一致で喜憂する事においてその生活の題目を得た。ポーツマウス以後、それがなくなった。

かれ男爵、ただ酒を飲み、白眼にして世上を見てばかりいた加藤の御前（ごぜん）は、がっかりしてしまった。世上の人はことごとく、彼ら自身の問題に走り、そがために喜憂すること、戦争以前のそれのごとくに立ち返った。けれども、男（だん）は喜憂目的物を失った。すなわち生活の対手（たいしゅ）、もしくはまと、あるいは生活の扇動者を失った。

がっかりしたのも無理はない。彼の戦争論者たるも無理はない。

「号外」、なるほど加藤男の彫像に題するには何よりの題目だろう、……男爵は例のごとくそのポケットから幾多の新聞の号外を取り出して、

「号外と僕に題するにおいて何かあらんだ。ねえ、中倉さん、ぜひ、その題で僕を、一ツ作ってもらいたい。……こんなふうに読んでいるところならなおさらにうれしい、」と朗読をはじめる。

第三報、四月二十八日午後三時五分発、同月同日午後九時二十五分着。敵は靉河右岸に沿い九連城以北に

工事を継続しつつあり、二十八日も時々砲撃しつつあり、二十六日九里島（きゅうりとう）対岸においてたおれたる敵の馬匹（ばひつ）九十五頭、ほかに生馬六頭を得たり——

「どうです、鴨緑江大捷（おうりょっこうたいしょう）の前触れだ、うれしかったねえ、あの時分は。胸がどきどきしたものだ」と、さらに他の号外に移る。

——戦死者中福井丸の広瀬中佐および杉野（すぎの）兵曹長（へいそうちょう）の最後はすこぶる壮烈にして、同船の投錨（とうびょう）せんとするや、杉野兵曹長は爆発薬を点火するため船艙（せんそう）におりし時、敵の魚形水雷命中したるをもって、ついに戦死せるもののごとく、広瀬中佐は乗員をボートに乗り移

らしめ、杉野兵曹長の見当たらざるため自ら三たび船内を捜索したるも、船体漸次に沈没、海水甲板に達せるをもって、やむを得ずボートにおり、本船を離れ敵弾の下を退却せる際、一巨弾中佐の頭部をうち、中佐の体は一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるものなり――

「どうです、聞いていますか」と加藤男爵は問えど、いつものことゆえ、聞いている者もあり、相手にせぬ者もある。けれども御当人は例によって夢中である。

「どうです、一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるものなり――なんという悲壮な最後だろう、僕は

何度読んでも涙がこぼれる」
酔(え)いが回って来たのか、それとも感慨に堪えぬのか、目を閉じてうつらうつらとして、体(たい)をゆすぶっている。おそらくこの時が彼の最も楽しい時で、また生きている気持ちのする時であろう。しかし、まもなく目をあけて、
「けれども、だめだ、もうだめだ、もう戦争(いくさ)はやんじゃった、古い号外を読むと、なんだか急に年をとっ、、、てしまって、生涯(しょうがい)がおしまいになったような気がする、……」
「妙、妙、そこを彫るのだ、そこだ、なるほど号外の

題はおもしろい、なるほど加藤君は号外だ、人間の号外だ、号外を読む人間の号外だ」と中倉翁は感心した声を出す。

「そこと言うのは」加藤男が聞く。

「そことは君が号外を前へ置いてひどくがっかりしているところだ」

「それはいけない、そんな気のきかないところは御免をこうむる。――」と彼の暗記しおる公報の一つ、常に朗読というより朗吟する一つを始めた、「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊は直ちに出動これを撃滅せんとす、本日天候晴朗なれども波高し――ここを願い

ます、僕はこの号外を読むとたまらなくうれしくなるのだから――ぜひここをやってくださいな。」

中倉先生微笑を含んでしばし黙っていたが、

「それじゃア、君に限った事はない。だれでも今の公報を読めば愉快だ、それを読んで愉快な気持ちになっておるところなら平凡な事で、別にこの大先生を煩わすに及ぶまいハヽヽヽ」

「なぜだ、これはおかしい、なぜです。」と加藤号外君、せきこんで詰問に及んだ。

「号外から縁がなくなって、君がかかりしておるところが君の君たるところじゃアないか。」

「大いにしかりだ」と自分は賛成する。

「それじゃア諸君は少しもがっかりしないのか」と加藤君大いに不平なり。

「どうだろう？　満谷君、」と中倉先生も少しこの問いには困ったらしい。自分も即答はしかねたが、加藤男爵の事についてかねていくらか考えてみた事のあるので、

「そうですねえ、まるきりがっかりしないでもないだろうと思う、というわけは、戦争最中はお互いにだれでも国家の大事だから、朝夕これを念頭に置いて喜憂したのが、それがおやめになったのだから、気抜けの

体(てい)にちょっとだれもなったに相違ない、それをがっかりと言えばがっかりでしょう。」
「そら見たまえ、僕ばかりじゃアない、決してない、だから、喜んでいるところを彫るのが平凡ならばだ、がっかりしているところだって平凡だろう、どうですね、中倉の大先生、」と「加と男」やや得意なり。
「だって君のようなのもない、君は号外が出ないと生きている張り合いがないという次第じゃアないか。」と中倉翁の答えすこぶるよし。
「じゃア僕ががっかりの総代というのか」と加藤男また奇抜なことをいう。

「だから君はわれわれの号外だ。」と中倉翁の言、さらに妙。加藤君この時、椅子(いす)から飛び上がって、
「さすが、中倉大先生様だ、大いによかろう、がっかりしたところ、大いによかろう、ぜひ願います、題して号外、妙、妙、」と大満足なり。
それから一時間ばかり、さらに談じかつ飲み、中倉翁は一足(ひとあし)お先に、「加と男」閣下はグウグウ卓にもたれて寝てしまったので、自分はホールを出た。
銀座は銀座に違いないが、なるほどわが「号外」君も無理はない、市街までがっかりしているようにも見える。三十七年から八年の中ごろまでは、通りがかり

の赤の他人にさえ言葉をかけてみたいようであったのが、今ではまたもとの赤の他人どうしの往来になってしまった。

そこで自分は戦争でなく、ほかに何か、戦争の時のような心持ちにみんながなって暮らす方法はないものかしらんと考えた。考えながら歩いた。

（完）

底本：「号外・少年の悲哀　他六編」岩波文庫、岩波書店
1939（昭和14）年4月17日第1刷発行
1960（昭和35）年1月25日第14刷改版発行
1981（昭和56）年4月10日第34刷発行
入力：紅　邪鬼
校正：LUNA CAT
2000年8月21日公開
2004年6月23日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。